

# 現代青年の「恋愛」・「結婚」観

——「金沢」調査の結果から——

西村 雄郎

## 1. はじめに

明治以来の日本の近代化過程において、「結婚」へいたる結婚相手の選択過程は、「家」制度のなかで「家」による強力な統制を受けた時代から、第二次世界大戦後の民主化過程の中で個人の自由な選択に基づく時代へと大きく変化してきた。この変化の中で、人々の「恋愛」に関する認識は「家」社会の秩序を脅かす異物から結婚相手を探し出す最良の方法へと変化し、「恋愛結婚」=「ロマンティック・ラブ」が至上の価値を持ち出す時代が出現したのである。

ところで、そこで求められた家族の理想像は「恋愛結婚」が個人々の結婚相手の自由な選択を原則とすることによって、家族成員外のいかなる第三者にも関与されずに家族構成員の手で「両性の合意に基づく、自由で、平等な家族」を作り上げていくというものであった。しかし、日本の高度経済成長と歩調をあわせて現れたのは、基本的には日本産業社会のシャドーワークを担うための集団として、伝統的な男女家族内分業観を維持させながら「愛情」ということばでほんの少しロマンティックな味付けを加えた「マイホーム主義」あるいは「ニューファミリー」と呼ばれた新たな「家族主義」的「家族」であった。

今、このような「家族」のあり方が問いなおされるばかりでなく、結婚にいたる過程としての「恋愛」のもつ意味、そしてさらには男と女の関係のあり方が問いなおされている。たとえば上野千鶴子は現代の日本社会において「恋愛が結婚に至るプロセスとしてではなく恋愛が『恋愛』それ自身として存立している」<sup>1)</sup> 事を指摘したうえで、自己実現をはかるためや、本当の結婚相手を求めて「恋愛」を結婚前にも結婚後にもあるいは結婚外にも繰り返す人々の存在を示し、現代を『汎恋愛の時代』としている。たしかに1960年代後半の性革命、1970年後半からのフェミニズム運動の高まりは、今日において「恋愛」「家族」のあり方を含めて新しい男と女の間関係を模索しながら生きていこうという人々をうみだしてきている。しかし、この一方で、高学歴、高収入、高身長といっ

た三高の条件を女性たちが求めいわば三高の条件を満たした男性を獲得するために「愛される女」を理想とし、また男性が従順で可愛い女性を求めた結果、いわゆる『お嬢様ブーム』なる現象が表われるなど<sup>2)</sup>、既成の「結婚・家族観」に基づいて「恋愛」を行い、これまでと同様な「家族」を形成していこうとする人々も数多く存在している。また、この両者の間で『クロワッサン症候群』<sup>3)</sup>『結婚しないかもしれない症候群』<sup>4)</sup>とよばれる既存の男と女の関係と新しい男と女の関係の間でゆれている人々も存在している<sup>5)</sup>。このように、現代における男と女のあり方は「マイホーム主義」を一つの理想として「恋愛」と「結婚」を単純に結びつけて考えた時代から、男と女の新たなあり方を模索する時代に至っていることは確かである。

ところで、このような問いなおしが日本よりも一足早く現れ、新たな男と女の間を求めて恋愛、結婚、離婚、恋愛、結婚、離婚のサイクルを繰り返す人々が大量に現れたアメリカの状況を捉えて A. スウィドラーは、アメリカにおける「恋愛」の形態は「選択から理解へ」「自己犠牲から自己実現へ」「性的制約から性的充足へ」そして「秘匿から公開へ」と移行し、「恋愛」のもつ意味もただ一人の人を結婚相手として選択する過程から、相手を理解し自己実現をはかる過程へと変化し、「恋愛」と「結婚」は必ずしも結びつかないものとなったとしている<sup>6)</sup>。では、日本社会におけるこのような模索はどのような方向へとむかおうとしているのであろうか。西欧社会から明治時代に輸入された「ロマンティック・ラブ」<sup>7)</sup>なる観念は、社会的な背景を異ならせるこの国において『恋愛結婚』の概念を愚直に信じた<sup>8)</sup>アメリカ人の姿を分析した A. スウィドラーが指摘するような形で、現代の日本において根付き、展開していくのであろうか。

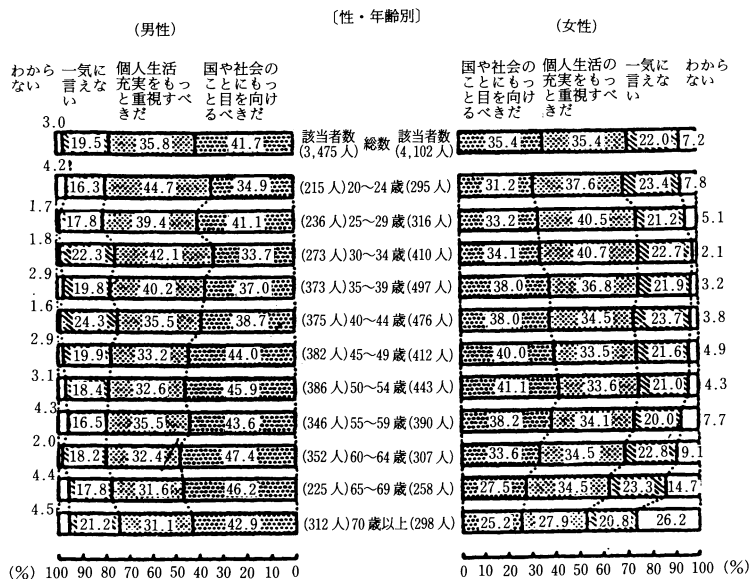
本稿の課題は、現代の若者の「恋愛観」・「恋愛行動」、 「結婚観」・「理想の夫婦・家族像」を明らかにしていきながら、日本社会における「恋愛」「結婚」のもつ今日的意味について考察を加えていくことにある。ここで使用されるデータは金沢市に住む 20 歳代の未婚の若者を対象として 1988 年におこなった調査の結果に基づくものである<sup>9)</sup>。

## 2. 現代青年のライフスタイルと「恋愛」・「結婚」の位置付け

ここでは現代青年の「恋愛観」・「結婚観」を検討する前提として、現代の若者の生活のなかで「恋愛」・「結婚」がどのような位置をもつのかを明らかにしておきたい。

若者がおとなしくなったといわれる。事実 1960 年代後半から 1970 年代前半

に日本社会のあちらこちらにあふれていた既存社会に抗議する「怒れる若者」はもはやみられず、生きる目的を自分の趣味にしばりこんだ「明るく、穏やかで、やさしい若者」という形容が現代の若者を象徴するキーワードであると言えるだろう<sup>10)</sup>。



資料出所 総理府広報室「月刊世論調査」1989年7月号

図1 社会志向か個人志向か

表1 若者が日常生活のなかで興味をもっているもの (%)

	おおいに興味ある	やや興味ある	あまり興味なし	計
A. 政治・経済・社会	10.2	48.5	39.9	100.0(363人)
B. 自分の仕事	43.3	41.0	13.8	100.0(363人)
C. 趣味・娯楽	73.6	22.9	2.8	100.0(363人)
D. 文化・教養	24.2	51.0	23.4	100.0(363人)
E. 異性・結婚	43.3	41.6	13.5	100.0(363人)

このことは、図1のように総理府が行った調査でも男性の「25～29歳層」を除く40歳以下の層、女性の34歳以下の層で「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」という志向性が「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という志向性を上回っている点にみることができる。我々が行った調査でも、表1のように「若者が日常生活のなかで興味をもっているもの」としては「趣味・娯楽」や「異性・結婚」などの個人にかかわる楽しみをまず第一にあげることができ、これにやや社会性をおびる「自分の仕事」が続き、「政治・経済・社会」に対する関心は非常に小さいものとしてしか現れていない。また、「自己の生活目標」(表2参照)をみても「みんなと力を合わせて世の中をよくする」という志向性はわずかしかみられず、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」、「その日その日を自由に楽しく過ごす」といった現在をどう生きるかという事柄に現在の生活目標が集約されて現れており、現代の若者の多くが個人の問題に主要な関心を持ち現在の生活をいかに「なごやかに」「楽しく」生きるかに焦点をあてて生活しているかがわかる。

このように今を「楽しく」生きようとする若者にとって「恋愛」、「結婚」の

表2 自己の生活目標 (%)

1. その日その日を自由に過ごす	23.8
2. しっかりと計画をたてて豊かな生活を築く	34.8
3. 身近な人たちとなごやかな毎日を過ごす	36.8
4. みんなと力を合わせて世の中をよくする	2.7
0. DK・NA	1.8
計	100.0(551人)

表3 恋人の有無

1. 恋人がいる	41.4
2. 恋人はいないが欲しいと思う	51.5
3. 恋人はいないし欲しいとも思わない	7.1
計	100.0(307人)

表4 結婚したいか否か (%)

	結婚したいと 思う	結婚したいと 思わない	計
恋人がいる	96.9	3.1	100.0(128人)
恋人はいないが欲しい	97.4	2.6	100.0(156人)
恋人はいないし欲しくない	81.0	19.0	100.0( 21人)
全 体	96.1	3.9	100.0(305人)

問題はどのような問題として現れてきているのであろうか。表3は恋人の有無を尋ねたものであるがこの結果をみると現在「恋人がいる」と答えたものは4割、また「恋人が欲しい」と答えたものが5割おり、9割以上の者が「恋人」と呼ばれる存在を意識していることがわかる。さらに、「結婚したいか、否か」の結果を表4にみると96.1%の若者が将来は「結婚したい」と考えており、男と女の関係のゆれや初婚年齢の高齢化が指摘されているにもかかわらず、現代の若者の多くがその一生のなかで「恋愛」、「結婚」は通過していく最も重要な問題のひとつとして考えていることがわかる。

### 3. 現代青年の「恋愛観」・「恋愛行動」

#### 1) 現代青年の「恋愛観」

では、現代の若者は「恋愛」と「結婚」のあり方をどう考えているのであろうか。表5は調査回答者の「結婚・恋愛観」をみたものであるが、これを見るとD「恋愛と結婚は別である」という質問に対して「そう思わない」と答えた人は18.6%にとどまり、今回の調査回答者の多くが「恋愛」の帰結は必ずしも「結婚」に結びつかないと考えていることがわかる。また、「結婚」についての意識をみても、約85%の人がA「結婚は一人前になる」ことを必ずしも意味するものではなく、またF「本人が選択するなら一生結婚しなくてもよい」と4割近い人が考えるなど「結婚」に対しても既成の観念をはなれた自由な考え方が広がり、「恋愛」することと「結婚」することは異なるもの、「結婚」はしなくてもかまわないものという意識が定着していることがわかる。

表5 結婚観・恋愛観

(%)

	そう 思 う	ど い ち え ら な も い	そ う 思 わ な い	計
A. 人は結婚することによって一人前になる	14.8	45.0	38.3	100.0(358人)
B. 好きな男女と一緒に暮らすのに婚姻届けをだす必要はない	19.6	37.8	40.1	100.0(358人)
C. 正式な結婚をする前にある期間一緒にくらししてみた方がよい	30.8	44.2	22.6	100.0(358人)
D. 恋愛と結婚は別である	39.4	39.4	18.6	100.0(358人)
E. 結婚は一生に一度でなくてもよい	19.2	41.0	36.9	100.0(358人)
F. 本人の選択なら一生結婚しなくてもよい	64.7	20.5	12.2	100.0(358人)

表6 恋人の有無べつにみた恋人のイメージ (MA)

(%)

	心 の 支 え	相 談 相 手	何 立 か と つ 役 に 人	一 緒 に 遊 ぶ 人	た い だ た 一 緒 に 人	フ の ア シ ョ ン 部	性 的 的 欲 求 象	人 数
恋人有	70.3	49.2	25.7	60.2	36.7	3.9	17.2	128人
恋人無	63.1	54.1	21.7	55.4	26.1	1.3	10.8	151人
全 体	66.3	51.9	23.2	57.5	30.9	2.5	13.7	279人

ところで、現代の若者は自らが「恋愛」に立ち向かった時、このような意識をもち続けることができるのであろうか。若者が「恋人」と呼ぶ人は、どのようなイメージをいっている人をさしているのかをみながらこの問題を考えてみたい。表6は現在「恋人」が「いる人」と「いない人」に分けて「恋人」の

イメージを尋ねたものであるが、これをみると現在「恋人」が「いる」、「いない」にかかわらず、「恋人」とは、「心の支え」としても「相談相手」としても信頼でき、「一緒に遊んでも」あるいは「一緒にいるだけで」楽しい人と答えた人が多く、「恋人」を「ファッション」とか何かと役に立つ「ベンリー（便利）くん」としてではなく、人格的信頼に基づく存在としてとらえていることがわかる。ところで、このことと、表4でみたように96.1%の人が自分は結婚したいと望んでいること、またB「男女が一緒に暮らすには婚姻届けが必要」だと考え事実婚ではなく制度婚を多くのひとが望んでいることやE「結婚は一生に一度であるべきだ」（表5参照）と考えている点等をあわせて考えてみると、「恋愛」一般には比較的自由的意識をもつ若者たちも、いざ自分の問題としてこれらの問題が現れたときには「恋愛」と「結婚」を結びつけ「結婚」のためのパートナーという意味での「恋人」というイメージをいだいていることがわかる<sup>11)</sup>。

## 2) 現代青年の「恋愛行動」

では、これらの志向性を示す人々の「恋人」との現実の関係は具体的にはどのようなものなのであろうか。若干サンプル数は少なくなるが、現在「恋人がいる」と答えた人に限ってその交際のあり方をみてみよう。

まず、これらの人々がどのようにして知合ったのかをみると表7のように「知人・友人の紹介」が33.6%と最も多く、これに次いで「職場で知合った」が25.8%と続き、このあとに「学校時代からの交際の継続」「町で声をかけた・かけら

表7 恋人とどのように知合ったか (%)

見合い	3.9
学 校	11.7
職 場	25.8
個人参加のサークル	5.5
友人・知人の紹介	33.6
街で声をかけた	10.1
その他	9.4
計	100.0(128人)

れた」がほぼ10%台で並び、今回の調査では「見合い」という回答は非常に少なかった。

次に、彼らにとって「恋人」とはどのような存在なのかをみてみよう。表8は「結婚」との関連で「恋人」の存在の位置付けを尋ねたものであるが、これをみると男性の80.8%、女性の80.6%が現在の「恋人」とはなんらかの形で「結婚を考えた」ことがあると答えている。さらに男性の42.3%女性の48.6%は「結婚」の話を二人の間で具体化させており、「恋人」とは「結婚」を意識するかたちで付き合っている相手をさすものとして多くの若者が考えていることがわかる。

そこで、これらの若者が恋人とどのように付き合っているのかをみたのが表

表8 男女別にみた恋人との結婚話の進み具合 (%)

	具体的に結婚話を進行中	二人で約束	相手に話した程度	一人で考えている	考えたことがある	今の相手とは考えていない	結婚自体まだ考えていない	計
男性	19.2	23.1	0.0	15.4	23.1	3.8	15.4	100.0(52人)
女性	21.6	27.0	2.7	12.2	23.0	6.8	6.8	100.0(74人)
全体	20.6	25.4	1.6	13.5	23.0	5.6	10.3	100.0(126人)

表9 交際中の男女の役割 (%)

	男性が行なう	お互いに行なう	女性が行なう	2人ともしない	計
従う	0.8	60.3	23.8	15.1	100.0(128人)
甘える	3.2	64.3	23.0	9.5	100.0(128人)
細かいことに口をはさむ	15.1	21.4	16.7	46.8	100.0(128人)
大切なことを相談する	0.8	75.4	11.9	11.9	100.0(128人)
身の回りの世話をする	0.8	20.8	32.8	45.6	100.0(128人)
デートの時の支払いをする	40.8	57.6	0.8	0.8	100.0(128人)
車などで送り迎えをする	65.9	20.6	3.2	10.3	100.0(128人)
セックスに誘う	32.8	28.7	1.6	36.9	100.0(128人)



9である。ここで注目されるのは、少なくとも私の予想より多くの若者たちが多くの項目で「両方する(二人ともする)」と答え、交際期間中は男女対等の関係をつくっている点である。しかし、この一方で主として「身の回りの世話をを行い」相手に「甘え」「従う」などのことが女性の役割として、また「車での送迎」「デートの支払」「セックスに誘う」ことなどが男性の役割として、各々伝統的な男女役割観に基づいて構造化されている姿もみることができる。

では、恋人の意味付けの違いはこれらの行動にどのような影響を及ぼしているのだろうか。そこで、表6できいた「恋人」のイメージを、「心の支え」「相談相手」「ただ一緒にいたい人」という「精神的関係を重視するグループ」と、「何かと役に立つ人」「一緒に遊ぶ相手」「ファッションの一部」「性的欲求の対象」という「遊び相手としての関係を重視するグループ」に分け、その各々のグループの付き合い方をみたのが表10である。

この表をみてまず第一に気が付くことは、2のグループとも「高得点層」ほど、一項目(「遊び相手としての関係を重視するグループ」の「世話」の項目)を除いたすべての項目で「しない」と答える人が少なくなっていることである。このことは、どのような意味のものであれ「恋人」の意味合いが高まれば高まるほどここにあげた多くの行為はより多くなされているという事実を示している。

第二に注目されるのは第一の点と同様に、2つのグループにおける「高得点層」ほど、「世話をする」、「支払いをする」などという少数の例外を除いて「両方がする(二人ともする)」と答えた人の割合が「低得点層」より高く現れているという事実である。特に、この傾向は「精神的関係を重視するグループ」のなかの比較で顕著であり、精神的な関係性が深まれば深まるほど、従来からの「女が男に従う」あるいは「女が男に甘える」といった伝統的な関係から離れ、「男も女も相互に甘え」「男も女も相談したうえで正しい方へ従う」といった、二人のあいだに対等な関係が作りだされてきていることがわかる。

しかしこの一方で、第三に「身の回りの世話をする」という項目では女性「片方(一人)」が行う場合が多く、また「車の送りむかえ」や「支払い」を行うのは男性「片方(一人)」が多いと答えているなど、男女相互の役割が明確に規定されている項目があることにも注意しておきたい。特に、結婚後の家事一般を想像させる「身の回りの世話をする」という項目においては「精神的な関係」の「高得点層」ほど女性「片方(一人)」がする割合が高まってきており、ここに相互の精神的な関係性が高まる中で「男に尽くす女」という像に回帰してい

表 10 恋人の意味と交際中の男女の役割 (%)

		精神的関係		遊びを中心とした関係	
		++	+	+	++
従 う	両方	69.7(46人)	50.8(31)	60.0(53)	70.6(24)
	片方	21.2(14)	27.9(17)	25.8(24)	20.6(7)
	しない	9.1(6)	21.3(13)	17.2(16)	8.8(3)
甘 える	両方	71.2(47)	54.7(35)	62.4(58)	70.6(24)
	片方	27.3(18)	27.9(17)	23.7(22)	23.5(8)
	しない	4.5(3)	14.8(9)	10.8(10)	5.9(2)
口は さむ	両方	22.7(15)	21.3(13)	20.4(19)	23.5(8)
	片方	33.3(22)	29.5(18)	30.1(28)	35.3(12)
	しない	43.9(29)	49.2(30)	48.4(45)	41.2(14)
相 談 す る	両方	83.3(55)	67.2(41)	76.3(71)	73.5(25)
	片方	12.1(8)	13.1(8)	11.8(11)	14.7(5)
	しない	4.5(3)	19.7(12)	11.8(11)	11.8(4)
世 話 す る	両方	19.7(13)	21.3(13)	23.7(22)	11.8(4)
	片方	42.4(28)	24.6(15)	34.4(32)	29.4(10)
	しない	37.9(25)	54.1(33)	40.9(38)	58.8(20)
支 払 す る	両方	57.6(38)	59.0(36)	62.4(58)	55.9(19)
	片方	42.4(28)	39.3(24)	36.6(34)	44.1(15)
	しない	0.0(0)	1.6(1)	1.1(1)	0.0(0)
車 の 送 迎	両方	22.7(15)	18.0(11)	20.4(19)	20.1(7)
	片方	71.2(47)	67.2(41)	66.7(62)	76.5(26)
	しない	6.1(4)	14.8(9)	12.9(12)	2.9(1)
セ ツ に 誘 う	両方	37.9(25)	19.6(12)	21.5(20)	44.1(15)
	片方	37.9(25)	29.5(18)	33.3(31)	32.4(11)
	しない	24.2(16)	50.8(31)	45.2(42)	14.7(5)

注 ここにおける「精神的関係」とは、表6の「恋人のイメージ」で「恋人」とは「心の支え」「相談相手」「ただ一緒にいたい人」という項目に指標を限定し、この項目の2項以上に「はい」と答えた人を「++」2項目未満の人を「+」とした。また、「遊びを中心とした関係」の「++」は「何かと役に立つ人」「一緒に遊ぶ相手」「ファッションの一部」「性的欲求」の対象の3項目以上に「はい」と答えた人、「+」はこれ以外の人をさしている。

く女性、あるいはそうさせていく男性の姿をみることができる。

第四に注目しておきたいのは「遊び相手としての関係を重視するグループ」の回答傾向である。ここにおいても全般的には関係性が高まるにつれてなされる行為は増加するという傾向がみられる。しかし、「大切なことを相談する」という項目で「高得点層」と「低得点層」を比較すると関係が深まっても「相談しない」と答えた人の割合は減少せず、また「身の回りの世話」においては「低得点層」ほど「世話」をする割合が高まるなど、これら2つの項目では関係性の深まりが、「精神的関係を重視するグループ」においては大きなのびをみせたこれらの行為を増加させていないことがわかる。さらに「セックスに誘う」では「高得点層」で「しない」と答えている人の割合は極めて低く、「両方(二人とも)」が「誘う」と答えている人が多い。これらのことは、このタイプの若者が「結婚」に結びついた「恋愛」ではなく、「セックス」を関係性の焦点として相互に相手に干渉せず結びついている「恋人」関係をもっていることを示しており、ここに「恋人」関係のもう一つの現代的なあり方をみることができる。

### 3) 現代青年の「恋愛観」と「恋愛行動」

さて、これまでみてきたことをまとめてみよう。

まず第一に指摘できるのは現代の若者がもつ「恋愛観」の二重構造である。それは、ひとつは一般論として若者たちがもつ「恋愛と結婚は別もの」「本人の選択なら一生結婚しなくてもよい」という意識であり、もうひとつは自分自身に関わる「恋愛」においては「結婚」を前提として考えているという、この2つの意識である。この2つの意識が若者の中に混在し、現代の若者が状況によって一般論と個別論を使い分けることによって恋愛観のゆれが現れてきているとみることができる。

これと同様の結果は「恋愛行動」の中にもみることができる。「精神的関係を重視するグループ」において、一方で「身の回りの世話をする」「デートの時の支払いをする」という2項目を除いた6つの項目で「高得点層」ほど「2人とも行う」と回答する人の割合が高まっておりここに「男女対等」原理に基づく男女の相互依存関係という理念的に新しい形態の付き合いかたが関係の理念的な面で見られるのに対して、これとは逆に具体的な行動が伴う「身の回りの世話」は関係が深まれば深まるほど「女性」が行うようになるという図式はまさにこの典型例である。ここに一般的平等に基づく意識としての男女対等原理の拡大と個別的な実利的利害に基づく男女間の(それも「男は外、女は内」とい

った伝統的意識に基づく) 明確な役割分担の存在をみることができる。

ところでさらにもう一点ふれておきたいのは、これらの人々とはやや位相を異ならせる人々の存在である。それは現在の恋人とは「結婚を考えず」、また行動においても「セックス」にひとつの焦点をあわせ「恋人を遊び相手として」みる若者たちである。この若者たちは当面「結婚」を意識せず「恋愛」を「恋愛」の内部で完結するものとして受けとめることでこのような意識・行動形態をとっていると考えることができる。

#### 4. 現代青年の「結婚観」・「家族観」

##### 1) 結婚の動機

すでに表4でみたように今回の調査では96.1%の若者が「結婚したい」と答えている。そこで、どのような理由で結婚したいと考えているのかを尋ねたのが表11である。これをみると「みんながするから」「ただなんとなく」という受け身な回答は少なく、男女とも1位に「好きな相手と暮らしたい」、2位に「子供が欲しい」、3位に「独身でいるのはさみしいから」といった理由を各々の項目で4割以上の人があげている。特に女性の場合、これらの3項目に続くのは「ひとりで生活していくのは経済的に困難だから」が17.9%と続くだけで、いわば「愛情」と「子供」、そして「孤独感の解消」の3つの要因に「結婚」の理由が集約されている。これにたいして、男性の場合は女性と同様に「愛情」を一番大きな理由としてあげながらも「子供」をあげる人は女性と比べ大きく減少しこれにかわって「ひとり暮らしは不便だから」「社会的信用をうるため」、さらに「性的欲求を満たすため」など実利的な理由を「結婚」を動機付ける要因

表11 結婚したい理由(MA)

(%)

	一人で生活するのが困難	好きな人と一緒に暮らしたい	子供が欲しいから	性的欲求を満たすため	社会的信用を得るため	独身はさみしいから	一人暮らしは不便	みんながするから	ただなんとなく	人数
男性	10.3	77.9	43.4	19.1	30.9	40.4	34.6	5.9	5.1	134人
女性	17.9	84.1	60.3	4.6	13.9	49.0	6.0	11.3	2.6	159人
全体	14.0	80.5	52.2	11.3	21.8	45.7	19.5	8.9	4.4	293人

としてあげており、女性と男性では「結婚」を動機付ける要因がいくらかことなることがわかる。

つぎに図2を通してこれらの人々が何歳までに結婚したいと考えているのかをみると、男性のピークは27.28歳にみられここを頂点として高低両年齢にわ

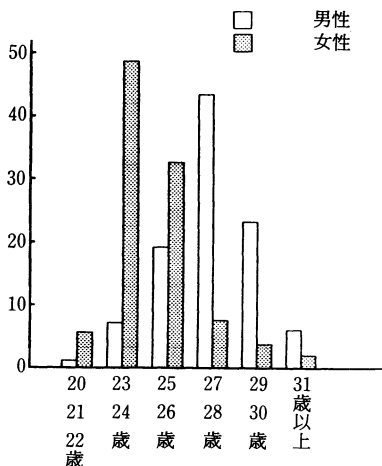


図2 自分が結婚したいと考える年齢

表12 性別でみた適齢期の有無 (%)

	男性には 適齢期がある	男性には 適齢期はない	計
男 性	47.6	52.4	100.0(105人)
女 性	36.5	63.5	100.0(115人)
全 体	41.8	58.2	100.0(220人)

	女性には 適齢期がある	女性には 適齢期はない	計
男 性	57.5	42.5	100.0(105人)
女 性	62.3	37.7	100.0(115人)
全 体	60.0	40.0	100.0(220人)

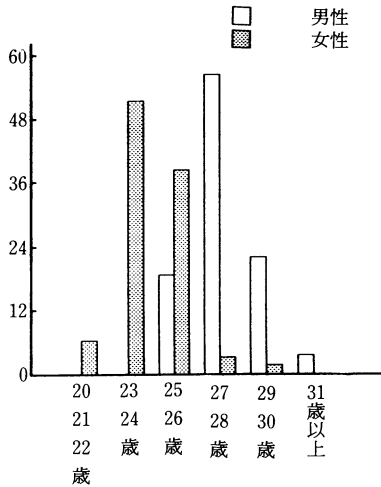


図3 結婚適齢とする年齢

かれて分布しているのに対して、女性は23.24歳をピークとして、25.26歳までに結婚しようと考えている女性が全体の約9割を占めている。ところで表12に回答者の適齢期観をみると、男性には4割が適齢期が存在し6割が適齢期はないと答え、これとは逆に女性については6割が適齢期が存在し4割が存在しないと答え、男性よりも女性の側に適齢期という年齢要因による結婚圧力がつよく働いていることがわかる。また、適齢期とされる年齢を図3にみると、その結果は図2の男性・女性の適齢期と概ね一致しており、自分が適齢期と考えている年齢の時期に自分自身も結婚したいと考えていることがわかる。

さらに、この適齢期を決定する要因をみると（表13参照）、女性の場合には「社会的経験を積んだとき」といった社会的条件および「子供が欲しい」といった理由からくる「出産適齢期」に加えて、「実際に結婚する人がおおいとき」といった社会的圧力を約2割の人があげており、女性の場合には個人的な結婚動機と社会的な結婚圧力が重なり合うことによって、結婚への動機付けが強化されてくることがわかる。これに対して男性の適齢期は「経済的に自立できるとき」「社会的経験を積んだとき」「一人前とみなされたとき」といった経済的・社会的条件に適齢期観が集約される。しかも適齢期そのものが存在しないと考える人が多いことを合わせて考えてみると、年齢要因による結婚圧力は女性と

表 13 適齢期を決定する理由

(%)

男 性 の 場 合								
	1	2	3	4	5	6	7	計
男 性	20.4	44.9	14.3	12.2	6.1	0.0	2.0	100.0( 49 人)
女 性	19.5	58.5	9.8	0.0	4.9	0.0	7.3	100.0( 41 人)
全 体	20.0	51.1	12.2	6.7	5.6	0.0	4.4	100.0( 90 人)
女 性 の 場 合								
	1	2	3	4	5	6	7	計
男 性	25.0	1.7	15.0	13.3	25.0	16.7	3.3	100.0( 60 人)
女 性	26.5	7.4	14.7	0.0	19.1	29.4	2.9	100.0( 68 人)
全 体	25.8	4.7	14.8	6.3	21.9	23.4	3.1	100.0(128 人)

注 1 学校を卒業し、ある程度社会的経験を積んだ時期

2 収入が安定し経済的に自立できる時期

3 世間に一人前とみなされるような時期

4 異性の結婚適齢期とのバランス

5 実際に結婚する人の多い年令

6 出産適齢期とのバランス

7 その他

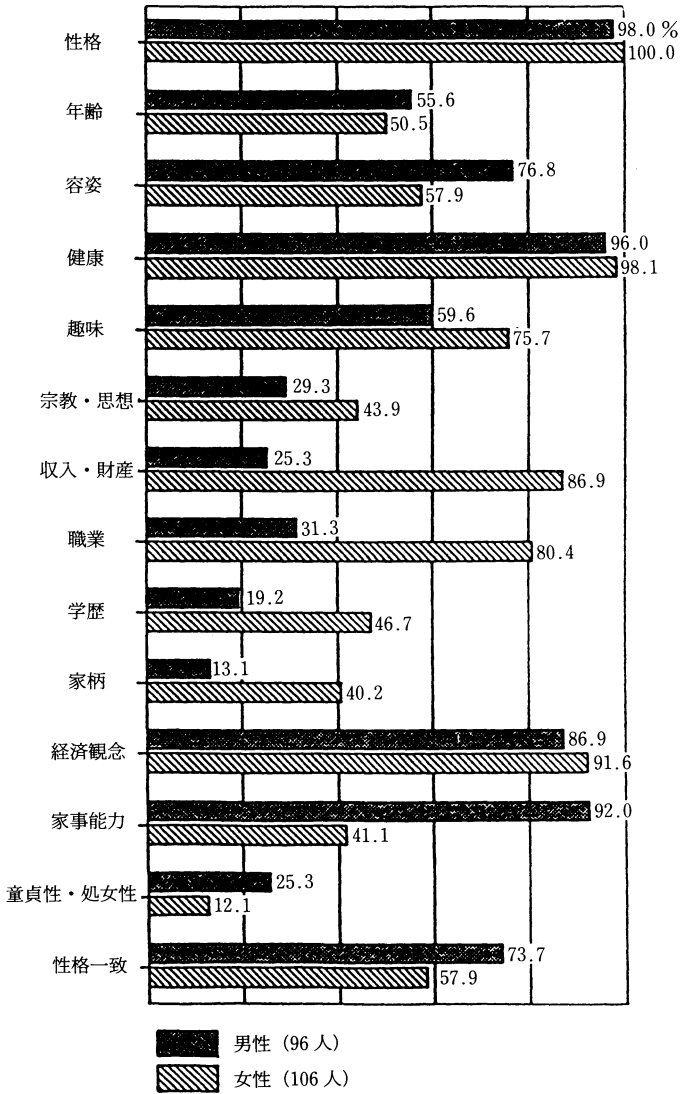
比べて比較的弱く、男性の場合は「愛情」「子供」といった女性と重なり合う要因と経済・社会的条件が加味されることによって結婚へ動機付けられるものと考えられる。

## 2) 結婚相手の条件

このような結婚動機、適齢期観をもつ男性、女性が結婚をする際に相手に求める条件についてみよう。

図 4 をみると男女とも「性格」「健康」「経済観念」を共通して重視する項目としてあげ、これについて「年齢」「容姿」「趣味」「性格の一致」などの項目を男女とも 50% を超える人々が重視している。さらに、結婚相手選択の条件を男女別に詳しくみると、男性が女性に求める項目では「性格」「健康」「経済観念」の他に「家事能力」「容姿」を 4 分の 3 以上の人々が条件として重視し、これに次いで「趣味」「性格の一致」「年齢」などの項目を 50% 以上の人々が重視する項

西村：現代青年の「恋愛」・「結婚」観



注 「たいへん重視する」と「重視する」を合わせた数値である。

図4 結婚相手を決めるときの重視項目



目としてあげている。これに対して、女性が男性に求める項目では「性格」「健康」「経済観念」に加えて「収入・財産」「職業」「趣味」を75%以上の人々が重視し、これに次ぐ条件として「性格の一致」「容姿」「年齢」などの項目をあげている。

ところで、これらの項目のなかでは、女性の重視する「収入・財産」「職業」、男性の重視する項目では「家事能力」といった項目で男女の選択率に大きな違いがみられ、これ以外にも「学歴」「家柄」「容姿」等の項目で性差が大きく現れ、男性と女性では相手の選択基準が異なっているように見える。そこで男女各々が求める結婚相手のトータルな選択基準を知るためこれらの項目について因子分析を行った結果が表14, 15, 16である<sup>12)</sup>。

表14は全体の様子を見たものであるが、0.50水準を解釈力のめやすとしみた場合、

第1因子は「収入・財産」「職業」「学歴」「家柄」

第2因子は「年齢」「容姿」「家事能力」「童貞・処女性」「性的一致」

第3因子は「性格」「経済観念」

をあげることができる。次に男性が女性を選択する際の基準項目としてあげたものについてみると(表15参照)

表14 全体(男女)での因子負荷量

	因子1 FACTOR 1	因子2 FACTOR 2	因子3 FACTOR 3
CHA (性格)	-0.11808	-0.15652	<u>0.70944</u>
AGE (年齢)	0.32499	<u>0.53553</u>	-0.19488
STY (容姿)	0.13390	<u>0.61230</u>	0.04670
HEA (健康)	0.13929	0.24441	<u>0.44557</u>
HOB (趣味)	<u>0.44809</u>	0.05386	<u>0.49053</u>
REL (宗教・思想)	0.22376	-0.20358	0.32059
INC (収入・財産)	<u>0.77750</u>	-0.12353	0.19441
JOB (職業)	<u>0.83099</u>	0.01243	0.20241
CAR (学歴)	<u>0.82410</u>	0.12299	0.02283
FAM (家柄)	<u>0.75963</u>	0.12124	-0.09959
ECO (経済観念)	0.10831	0.14748	<u>0.68374</u>
HOM (家事能力)	-0.14307	<u>0.76114</u>	0.11695
VAR (童貞・処女)	0.02525	<u>0.64720</u>	0.00669
SEM (性的一致)	-0.17227	<u>0.51180</u>	<u>0.44495</u>

西村：現代青年の「恋愛」・「結婚」観

表 15 男性が女性に結婚相手の条件として望む事柄の因子負荷量

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3
CHA (性格)	-0.34686	<u>0.54250</u>	-0.36193
AGE (年齢)	0.39856	-0.02278	<u>0.58355</u>
STY (容姿)	0.16783	0.23672	<u>0.55950</u>
HEA (健康)	0.07805	<u>0.48373</u>	0.11141
HOB (趣味)	0.33202	<u>0.47697</u>	-0.01857
REL (宗教・思想)	<u>0.45329</u>	0.18241	- <u>0.59866</u>
INC (収入・財産)	<u>0.78755</u>	0.06755	-0.01467
JOB (職業)	<u>0.79908</u>	0.18487	0.22369
CAR (学歴)	<u>0.87506</u>	-0.01800	0.10195
FAM (家柄)	<u>0.68213</u>	0.00280	0.28050
ECO (経済観念)	-0.03594	<u>0.75649</u>	-0.08406
HOM (家事能力)	0.18940	<u>0.61357</u>	0.19379
VAR (童貞・処女)	0.18939	<u>0.36630</u>	<u>0.46699</u>
SEM (性的一致)	-0.07373	<u>0.69801</u>	0.13067

表 16 女性が男性に結婚相手の条件として望む事柄の因子負荷量

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3
CHA (性格)	-0.04784	<u>0.67640</u>	-0.08580
AGE (年齢)	0.16271	-0.00577	<u>0.60000</u>
STY (容姿)	0.29779	0.16011	<u>0.40573</u>
HEA (健康)	0.11952	<u>0.41077</u>	0.26960
HOB (趣味)	<u>0.40917</u>	<u>0.51802</u>	0.02014
REL (宗教・思想)	-0.00559	0.28572	-0.05792
INC (収入・財産)	<u>0.48026</u>	<u>0.49019</u>	0.33162
JOB (職業)	<u>0.58699</u>	<u>0.47055</u>	0.18503
CAR (学歴)	<u>0.81133</u>	0.14790	0.13140
FAM (家柄)	<u>0.86722</u>	-0.10020	0.00377
ECO (経済観念)	0.15408	<u>0.68412</u>	0.06731
HOM (家事能力)	0.26934	-0.07871	<u>0.67690</u>
VAR (童貞・処女)	-0.04632	-0.15471	<u>0.68492</u>
SEM (性的一致)	-0.20281	0.26289	<u>0.57116</u>

第1因子は「収入・財産」「職業」「学歴」「家柄」

第2因子は「性格」「経済観念」「家事能力」「性的一致」

第3因子は「年齢」「容姿」

をあげることができる。最後に男性選択の条件として女性があげた項目をみると(表16参照)

第1因子は「職業」「学歴」「家柄」

第2因子は「性格」「趣味」「経済観念」

第3因子は「年齢」「家事能力」「童貞・処女性」「性的一致」

をあげることができる。

これら各々の因子を解釈していくと、表14でみた全体の第1因子は個々人の経済力を問うファクターという意味で《経済力》の基準、第2因子は「家事能力」「童貞・処女性」「性的一致」も含めて個々人のみためを問う基準という意味で《外見性》の基準、そして第3因子は個々人の内面性を問う基準という意味で《内面性》の基準、として各々名付けておきたい。この各々は男性の因子、女性の因子の中にも共通にみられ、男女とも第1因子は《経済力》、第2因子は《内面性》、第3因子は《外見性》をしめしている。

ところで、この男女個別の基準のうち、《経済力》の因子負荷量をみると男性と女性では項目別のその負荷量の値が大きく異なり、男性が女性に期待している要因としては「学歴」「職業」「収入・財産」といったアチーブメントな要因間に強い関連性をみることができのに対して、女性が男性にもとめる条件では「家柄」といったアスクライプトな要因と「学歴」「職業」とアチーブメントな要因間に強い関連性をみることができの。このことは、女性が男性を選択する場合、現在の「職業」「収入・財産」の他に、現在の「職業」「収入・財産」を支えている社会・経済的背景としての「家柄」をいわゆる「相手方のつりあい」として重視していることを示している。また、男性が女性の条件としてあげた「学歴」「職業」などの要因も女性と比べて弱いものの「家柄」との関連をもち、これらの要因を支える社会・経済的背景を問題としていると考えることができる。そこで、《経済力》と名付けた基準を現在の経済力をささえる社会・経済的背景を含みこむという意味合いで《基本的経済力(生活力)》と改めておきたい。また、《内面性》の基準についても基準の水準を0.40までおとしてみると、男性は女性に「健康」や「趣味」との関連で、また女性は男性に「健康」や「収入」「職業」との関連で、《内面性》の基準を考えていることがわかる。このことは、男性が女性に「経済観念」「家事能力」を中心として「性格」のよ

い「健康」な女性による円満な家庭運営を行っていく能力をもとめていることを意味しており、また、女性も男性にすぐれた《内面性》に加えて安定した「収入」「職業」を基盤とした家庭運営能力を求めているとみることができることからこの《内面性》なる基準を《家庭運営能力》と改めたい。また、女性が男性に求める基準の第3因子の《外見性》は0.50を水準としているかぎりでは若干無理な解釈とみえるが0.40まで水準を下げると「容姿」との関連性がみられ、また男性の「家事能力」などは男性の家事に対する見た目での理解力（家事に「理解ありそうな人」あるいは家事を手伝ってくれそうな「やさしそうな人」といったことを意味している）と考えることができ、このような意味を加えたうえでこれらの要因を《外見性》の基準としておきたい。

次にこれらの3つの基準間の重視度をみると（図5参照）、男性は女性を《家庭運営能力》《外見性》《基本的経済力（生活力）》の順で選択し、女性は男性を《家庭運営能力》《基本的経済力（生活力）》《外見性》の順で選択しており、男性と女性とでは《基本的経済力（生活力）》《外見性》の基準の選択順位が異なっている。しかも男性が女性を選択する時、《外見性》の基準は《基本的経済力

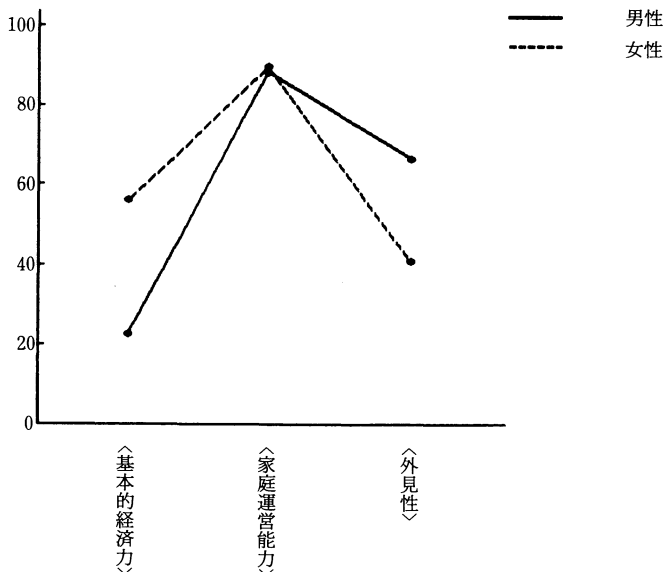


図5 結婚相手の条件

(生活力)》と40%以上の差があり、《家庭運営能力》《外見性》の2項目をまず重視しこれに付随させて《基本的経済力(生活力)》を重視するという構造をとるのに対して、女性は《家庭運営能力》をひとまず重視したうえで《基本的経済力(生活力)》と《外見性》の基準も重視しているといった構造をみることができる。

### 3) 理想の夫婦・家族像

さて、このような結婚の条件をあげる人たちはどのような夫婦・家族を理想の像として描いているのであろうか。

図6は理想の家族像を尋ねた結果だが、これをみると現代の若者は「みんなが対等で親しい友達同士のような家族」(「友達家族」)や「みんなが一心同体になっているような愛情家族」(「愛情家族」)といった、家族員が「平等」で相互の「愛」によって結び付けられた家族を理想としていることがわかる。これを夫婦関係の理想的なあり方をとおしてみると、表17のようにB「リーダーシップのもち方」やF「日常的な感情のもち方」は二分化されるものの、夫婦は「隠し事をもたず」「なるだけ一緒に過ごし」「やすらぎを得れるような」関係がよく、困ったことをおきたら「相談して決めたらよい」という「愛情家族」「友達家族」といった家族像に合致した夫婦像が浮かんでくる。

ところで表18は結婚後の夫婦の役割について尋ねたものであるが、「収入を

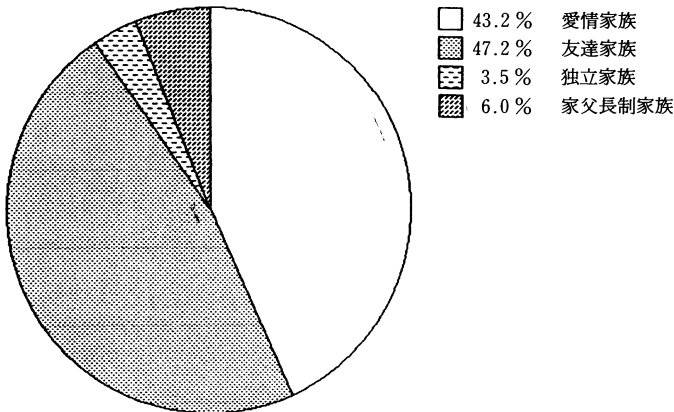


図6 理想とする家族像

得る」「家族の代表」といった役割は男性が担い、「家事」「家計管理」は女性が担うという伝統的家族内役割分業観に根ざす回答が現れている。また、表 19 は女性が結婚後就労することについて尋ねた結果であるが、これをみても「結婚後も就労を続けるべき」と考えているのは全体の 23.6%しかなく、おおよそ 4 分の 3 の人が出産を契機として一度は就労をやめるべきだと考えていることがわかる。さらに、これを表 20 のように男女別に「女性の就労」と「家事」の関

表 17 夫婦関係のありかた (%)

A	夫婦は何でも相談して決めるのがよい	89.7 (321人)
	あらかじめ夫が決めることと妻が決めることを分けておくのがよい	8.4 (30人)
B	夫婦は対等であるのがよい	48.0 (172人)
	夫婦のリーダーシップは夫がとるのがよい	50.0 (179人)
C	お互いに空いている時間は、夫婦なるべく一緒に過ごすのがよい	74.3 (266人)
	お互いに空いている時間は、お互いにやりたい事をやって干渉しない	23.2 (83人)
D	夫婦は隠し事をもたないのがよい	67.9 (243人)
	夫婦であってもお互いのプライベートな事にはふみこまないのがよい	30.2 (108人)
E	夫婦の間では安らぎが得られればそれでよい	69.6 (249人)
	夫婦は刺激があってお互いに向上するのがよい	27.7 (99人)
F	結婚したら恋人同志のような情熱的な関係がよい	50.3 (180人)
	結婚したら長年連れ添った夫婦のような落ち着いた関係がよい	46.9 (168人)

表 18 結婚後の夫婦役割

(%)

	夫が する	ど い ち え ら ば か 夫 と	ど い ち え ら な い も	ど 言 え ら ば か 妻 と	妻 が する	計
家計を支えるため収入を得る	39.4	44.2	13.1	0.3	0.0	100.0(358人)
子供の進路を決定する	5.4	12.5	76.9	1.0	0.3	100.0(358人)
家事をする	0.0	0.0	8.7	39.7	48.1	100.0(358人)
子供の躾をする	0.3	4.8	58.0	26.3	5.2	100.0(358人)
家族の代表者の役割をする	39.4	29.8	19.6	5.4	2.2	100.0(358人)
家計管理をする	0.3	2.9	15.7	41.3	36.2	100.0(358人)

表 19 性別でみた結婚後の女性の勤め

(%)

	1	2	3	4	計
男 性	13.1	65.2	18.1	3.6	100.0(138人)
女 性	32.9	40.0	11.0	16.1	100.0(155人)
全 体	23.6	51.9	14.3	10.2	100.0(293人)

1. 結婚後もずっと勤めるのがよい
2. 子供ができたら勤めをやめ、手がかからなくなったら再就職するのがよい
3. 子供ができたら勤めをやめ、ずっと勤めに出ない方がよい
4. 結婚後はずっと勤めないほうがよい

わりをみると、「女性は結婚後も就労を続けるべき」と答えた人でも男性の約9割、女性の約8割が主に妻が担うべきだと答えており、具体的な役割分担においては伝統的な家族内役割分業に基づく家族像を理想として描いていることがわかる。

このようにみえてくると、一方で家族の理想像として「平等」「愛情」を意識しながら、具体的な行動になると伝統的な男女役割分業に回帰するという姿がここにも現れてきている。そこで、ここの内実をもう少し詳しくみるため表17の「結婚後の夫婦の理想像」のB「夫婦間のリーダーシップ」の問題とEの「夫婦

表 20 性別でみた女性の就労と家事役割分担

(%)

		どちらとも いえない	どちらかと いえば妻	妻	計
男性	1	11.1	33.3	55.6	100.0( 18人)
	2	3.4	46.6	50.0	100.0( 88人)
	3	8.0	28.9	64.0	100.0( 25人)
	4	0.0	40.0	60.0	100.0( 5人)
	全体	5.1	41.2	53.7	100.0(136人)
女性	1	17.6	43.1	39.2	100.0( 51人)
	2	8.2	41.0	50.8	100.0( 61人)
	3	5.9	35.3	58.8	100.0( 17人)
	4	4.0	40.0	56.0	100.0( 25人)
	全体	10.4	40.9	48.7	100.0(154人)

1. 結婚後もずっと勤めるのがよい
2. 子供ができたなら勤めをやめ、手がかからなくなったら再就職するのがよい
3. 子供ができたなら勤めをやめ、ずっと勤めに出ない方がよい
4. 結婚後はずっと勤めないほうがよい

表 21 夫婦類型

(%)

現代的夫婦関係	15.1
中間型	46.7
伝統的夫婦関係	38.2
計	100.0(345人)

注

「現代的夫婦関係」とは表 16 の理想の夫婦関係で B で「夫婦は対等」、E で「夫婦は刺激し合うべき」と答えた人をさし、「伝統的夫婦関係」とは B で「リーダーシップは夫」、E で「夫婦は安らぎ」と答えた人をさし、中間型とはどちらでもないものをさす。

間の日常生活関係」のあり方を用いて夫婦の理想の類型化をはかったのが表 21 である。これをみると「現代的夫婦」を理想とする人は 14.9% しかなく、「伝



表 22 夫婦類型と夫婦役割 (%)

	どちらかという と収入を得るの は夫、家事は妻	その他	計
現代的夫婦関係	64.1 (18.2)	38.6	100.0(44人)
中間型	85.2 (28.2)	14.8	100.0(142人)
伝統的夫婦関係	90.0 (40.9)	10.0	100.0(110人)
全体	83.5 (31.4)	16.5	100.0(296人)

注

( ) は収入を得るのは夫で家事をするのは妻と強く考えている人の割合をさす。

表 23 夫婦類型と結婚後の女性の勤め (%)

	1	2	3	4	計
現代的夫婦関係	36.8	47.7	11.4	2.3	100.0(44人)
中間型	24.1	52.5	14.9	8.5	100.0(141人)
伝統的夫婦関係	16.1	53.5	14.3	16.1	100.0(112人)
全体	23.2	52.2	14.2	10.4	100.0(297人)

1. 結婚後もずっと勤めるのがよい
2. 子供ができたら勤めをやめ、手がかからなくなったら再就職するのがよい
3. 子供ができたら勤めをやめ、ずっと勤めに出ない方がよい
4. 結婚後ずっと勤めないほうがよい

「伝統的夫婦」を理想とする人の 37.2% やこれらの「中間型」のひとの 48.0% と比べて少数派であることがわかる。しかも、この類型と表 18 でみた「結婚後の家族内役割分業観」や表 19 の「女性の就労のあり方」をみると、表 22・23 のように「伝統的夫婦」を理想とする人ほど従来からの家庭内役割分業観を支持する傾向がみられ、結婚という事態に立ち入ってからは伝統的な家庭内役割を超えた新たな家族形成をめざす人はきわめて少数であることがわかる。

#### 4) 現代青年にとっての「結婚」

以上、これまで現代青年の「結婚観」と「夫婦・家族観」についてみてきた

のであるが、ここでみられた特徴点について整理を加えておきたい。

まず第一にここで指摘できるのは、結婚の動機、理想の「夫婦・家族観」をみると、多くの若者は「好きな相手と暮らしたい」あるいは「愛情のある家族」「友達同士のような家族」をもちたいといった、ほんやりとした「愛」を求めて結婚をしようとする傾向がみられることである。しかし、この「愛」なるものの実質は決して2人で作り上げていく過程で形成されたものでなく、理想の夫婦関係の具体的関係性をみていくと、伝統的男女役割分業観に基づく既成の社会の価値をそのまま受容したうえに構築されたものであり、「愛」なるものの実態がこういった既成の価値観を前提として組み立てられたものであることがわかる。

第二に、この結果、結婚相手を選択するときの条件も男女共通に《家庭運営能力》と《基本的経済力（生活力）》や《外見性》といった要因から構成され、夫らしい、妻らしい《家庭運営能力》に加えて、いわゆる高学歴、高収入、《基本的経済力（生活力）》、高身長（《外見性》）といった三高の条件も求められるという、きわめて功利的で、伝統主義的で現実主義的な条件が優先されるといふ傾向がみられる。

第三にふれておかななくてはならないのは男性と女性の結婚にのぞむときの社会環境、結婚の条件の相違である。適齢期という社会的圧力と出産という生理的時間におわれる女性にとって結婚とは、非常に限られた範囲の時間内での最も条件のよい相手をどう選択するかという問題として現れてくることになる。しかも、男性が年齢、容姿といった要因からなる女性の《外見性》を重視するなかで、女性が「好きな人と一緒に暮らす」ためには女性の既成の価値観（伝統的家族内男女役割分業）を認めることによつてのみよりよい男性を選択しうる可能性を確保できると考えることができる。これに対して適齢期といった社会的圧力を受ける割合が低く、結婚に臨むとき「愛情」に加えて家事を担うなどの実利的な理由を結婚の動機とする男性にとって伝統的家族内男女役割分業の維持は最低限の条件として現れ、すぐれた《家庭運営能力》をもつ可愛い《外見性》をもつ女性を理想とすることとなるのである。この結果、男性と女性両方から支持されることによつて理想としての「愛情家族」「友達家族」の実態は既成の伝統的男女役割分業観に基づく家族であるといった結果を生み出すこととなるのである。

## 5. おわりに

これまで金沢市におけるデータを用いて現代青年の恋愛・結婚・家族観についてみてきたのであるが、ここではこれらの結果を再整理しながら現代日本における「恋愛」と「結婚」のあり方について考察を加えてみたい。

さて、これらのデータをまとめるなかで第一に指摘しておかなくてはならないのは、現代の若者の「恋愛観」のなかに、一般論としての「恋愛」あるいは他人の「恋愛」に対する「恋愛と結婚は別のもの」と考える比較的自由的な「恋愛観」と自己にかかわる個別的な「恋愛」における「恋愛と結婚を結合させて考える」従来型の「恋愛観」が、二重の構造をもって存在しているという事実である。しかも、これと同様の構造は、若者の「恋愛行動」や「家族観」の中にも見ることができ、若者の「恋愛観」「結婚観」「夫婦・家族観」には一連の関係性をみることができるのである。第二に、この関係性を前提として若者たちの「恋愛観」「結婚観」「夫婦・家族観」をみていくと、個別的かつ具体的な問題になると従来からの男女役割分業に基づく意識、行動が現れる傾向が高く、現代の若者たちが伝統的男女役割分業に基礎をおく「夫婦・家族観」をもとにして自己の意識・行動を形成していることがわかる。このことは、自己のかかわる「恋愛」においては現代の若者は従来からの「夫婦・家族観」を前提として恋愛行動を取っている事を意味していると考えることができる。さらに、第三に結婚相手を選択する条件においては、この構造がより明瞭なものとして現れてきている。伝統的な「夫婦・家族観」を支持する若者たちが結婚相手の条件として示したのは伝統的男女役割分業観に基づく妻らしさ、夫らしさにもとづく《家庭運営能力》に加えて、男性は女性に可愛らしさを意味する《外見性》を、女性は高学歴・高収入に支えられた《基本的経済力（生活力）》を第二の条件として重視するという構造をとり、男女各々がこれまでの既成の社会の価値観をそのまま受容する形で結婚相手の選択をはかっていることがわかる。これに対して今回の調査でも現代青年の典型であるかのような「恋愛」を「恋愛」内部で完結させようとする一群の若者の存在をみることができた。しかし、これらの若者の中に既存の価値観にかわる新たな生き方を創造していこうとする姿をみることとはできず、いわゆる一時期の「遊び」として自分の「恋愛」のあり方を考えているとみた方が妥当なようにおもわれる。これらのことは若者の多くが自分自身の問題として恋愛・結婚問題が現れた場合、一般論と個別論を使いわけ、既成の「家族像」をそのまま受容することによって形成された「恋

愛観」「結婚観」に基づいて行動をとることを示しており、この意味においてこれらの若者の「恋愛」はスウィドラーが指摘するような「自己実現の過程としての『恋愛』」という像とは大きく乖離したものであるといえるであろう。

ところで、井上俊によれば、「恋愛結婚」とは顕在的には個人の側の「自由の要請」に基礎付けられたものとして見ることができるが、潜在的には「恋愛という『無政府的な力』を結婚という社会制度のなかに組み込んでしまうことによって恋愛からその牙を抜く」<sup>13)</sup>という社会からの「秩序の要請」によって基礎付けられているという。この意味でいうならば、ここに見てきた若者たちの恋愛・結婚観は一般論としての「自由の要請」の受容と現実社会に生きる具体的個人としての「秩序の要請」の受容の中にあるといえよう。しかも、この「秩序の要請」の受容は企業社会のなかで既存の社会的価値を肯定的に受容せざるをえない男性ばかりか、相対的に自由な立場にたつ女性においても三高という既存の社会的価値観に基づく条件を女性が男性に対してあげることによって肯定的かつ積極的に受容されているのである。

このようにみえてくると日本における「恋愛」「結婚」状況は、「『恋愛結婚』の概念を愚直に信じた」アメリカの状況とは大きく異なり、一部に新たな男と女の関係をもとめて生きる先端的な部分の人々は存在するものの、その多くは今日の日本（産業）社会を肯定的に受けとめる人々の伝統的な価値観と産業主義的価値観に支えられているとみることができるであろう。つまり、今日の日本における「恋愛」「結婚」という理念は、多くの若者が今日の産業社会を支持し、今日の生活をそのまま維持していこうという意識を基盤として形成されているものであり、この結果日本産業社会のシャドールワークを担う伝統的家族内男女分業役割を肯定した「家族」を前提として多くの場合に構成されてきていると考えることができるのである。この結果、「恋愛」と「結婚」そして「家族」形成は無前提に結びつき、「恋愛結婚（ロマンティック・ラブ）」という理念は、「恋愛」というベールのもとに男性を女性を日本産業社会を支える「近代」家族のオリの中に囲いこみ、日本産業社会を下支えする家族形成をはかる機能を担っているといえる。この意味において、西欧とは異なった社会的背景のもとで「恋愛（ロマンティック・ラブ）」なる理念を受容した日本社会にあっては<sup>14)</sup>、今日、「結婚」という現実に取り込まれる形で幻想としての「恋愛（ロマンティック・ラブ）」が存在し、幻想としての「恋愛（ロマンティック・ラブ）」が幻想として存在することによって「結婚」という現実が存在しているといえるであろう。

注

- 1) 上野千鶴子「恋愛病の時代」 上野千鶴子編『恋愛テクノロジー—いま恋愛でなに？—』ニュー・フェミニズム・レビュー1 1960年 60ページ
- 2) 例えば、その一例として、ベストセラーとなった二谷友里恵 『愛される理由』朝日新聞社 1990年を参照のこと。
- 3) 松原惇子 『クロワッサン症候群』 文芸春秋社 1988年
- 4) 谷村志穂 『結婚しないかもしれない症候群』 主婦の友社 1991年
- 5) これらについては海老沢武 『シングル・ライフ』中央公論社 1986年 青木やよひ 『シングル・カルチャー』有斐閣 1989年なども参照のこと
- 6) Swidler, A., "Love and Adulthood in Amerikan Culture", Smelser and Erikson 1985 pp120-147
- 7) 西欧的「恋愛結婚」の成立過程については井上俊 「恋愛結婚の誕生」『死にがいの喪失』 筑摩書房 1973年 172~199ページ参照のこと
- 8) 上野千鶴子「恋愛テクノロジー」 上野千鶴子編『恋愛テクノロジー—いま恋愛でなに？—』ニュー・フェミニズム・レビュー1 1960年 182ページ
- 9) この調査は1987年に金沢大学文学部社会学研究室において、社会調査演習(担当教官:間々田孝夫助教授(現立教大学助教授)および西村)の一環として行われたものである。調査対象者は石川県金沢市およびその近郊地区に居住する未婚の20歳以上27歳以下の男性と20歳以上24歳以下の女性を対象として、留置法と郵送法を併用しておこなった。各々選挙人名簿からランダムサンプリングを行い、留置法で350、郵送法で666サンプルを抽出した。回収数は、留置法で267(回収率76.3%)、郵送法で284(回収率42.6%)であった。なお、「恋愛・結婚」に対する調査は主として留置法で行い、郵送法では数項目の質問に限定して調査をおこなった。この結果本稿で用いた図表の回答者数に図表ごとでずれが生じている。なお、これらの詳細については金沢大学社会学研究室刊『いまどきの若者—石川県の青年意識—』1988年を参照していただきたい。また、これらの調査、分析を担当した金沢大学社会学研究室員の皆さんには記して謝意を記しておきたい。
- 10) このような若者ととらえて千石保は、現代の若者は他人との「差異性」にこだわりの、すべての出来事にたいして「客観的立場に立ち(当事者にならず)」、行動に「遊戯性」をもたせ、「相対主義的な価値観」をもって生きるという生き方を身につけ、「目的のために頑張るのではなく、行動それ自体に意味を見つけ」その時その時が楽しければ(=「ノレレ」ば)いいという「コンサマトリー(Consummatory)な生き方を志向していると、集約している。千石保『まじめ』の崩壊』 サイマル出版会 1991年

- 11) 山田昌弘は大学生に対する「恋愛意識」調査を行い、大学生の意識として「恋愛と結婚とは別のもの」という意識と「結婚には恋愛が必要」という意識が並存していることを指摘している（山田昌弘「恋愛の社会学」江原由美子他編著『ジェンダーの社会学』新曜社 1989年 119 ページ）。しかし、この質問においては一般化された質問に質問が限定されており、個々人が恋愛に直面した場合の対応の仕方には十分にふれられていない。
- 12) ここで用いる因子分析の結果は村田義和氏（当時金沢大学大学院修士課程在籍、現石川県立加賀高校教員）のおこなった分析の結果を用い、西村が再解釈を加えたものである。
- 13) 井上俊 前掲論文 196 ページ
- 14) 西欧的な「愛」の日本における受容の問題については、伊藤整「近代恋愛の虚偽」『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫 1981年所収をとりあえず参照のこと。

#### 追記

本稿は1991年度鹿児島女子大学公開講座『男と女—恋愛・結婚・家族—』において、西村が「”愛は勝つ”か？—1991・幻想としての恋愛・現実としての結婚—」として論じた原稿に変更、加筆を行ったものである。